



# ワークロード

---

- [ワークロード ペイン \(1 ページ\)](#)
- [VDI ワークロードを追加する \(2 ページ\)](#)
- [一般的なサーバー VSI ワークロードを追加する \(7 ページ\)](#)
- [Microsoft SQL ワークロードを追加する \(10 ページ\)](#)
- [Oracle ワークロードの追加 \(14 ページ\)](#)
- [Microsoft Exchange Server のワークロードの追加 \(18 ページ\)](#)
- [コンピューティングとキャパシティサイジングツール \(RAW\) のワークロードの追加 \(21 ページ\)](#)
- [HyperFlex Edge \(ROBO\) ワークロードを追加する \(24 ページ\)](#)
- [固定 \(リバース\) 構成のサイジング \(27 ページ\)](#)
- [サイジング計算ツール \(30 ページ\)](#)

## ワークロード ペイン

[ワークロード (Workloads) ] ペインでは、次の操作を完了できます。

### ワークロードの複製

既存のワークロードの [複製 (Clone) ] アイコンをクリックして、ワークロードのコピーを作成し、次のフィールドに値を入力します。

### ワークロードの編集

ワークロードプロファイルを編集するには、既存のワークロードの [編集 (Edit) ] アイコンをクリックします。

### ワークロードの削除

ワークロードを削除するには、既存のワークロードの [削除 (Delete) ] アイコンをクリックします。

### 仮想マシン数またはデスクトップ数の変更

ワークロードのデスクトップ数またはVM数を変更するには、[カウント (Count)] [カウント (Count)] ボックスの値を変更します。[保存 (Save)] をクリックします。

## VDI ワークロードを追加する

デフォルト値を変更するには、[カスタマイズ (Customize)] をクリックします。

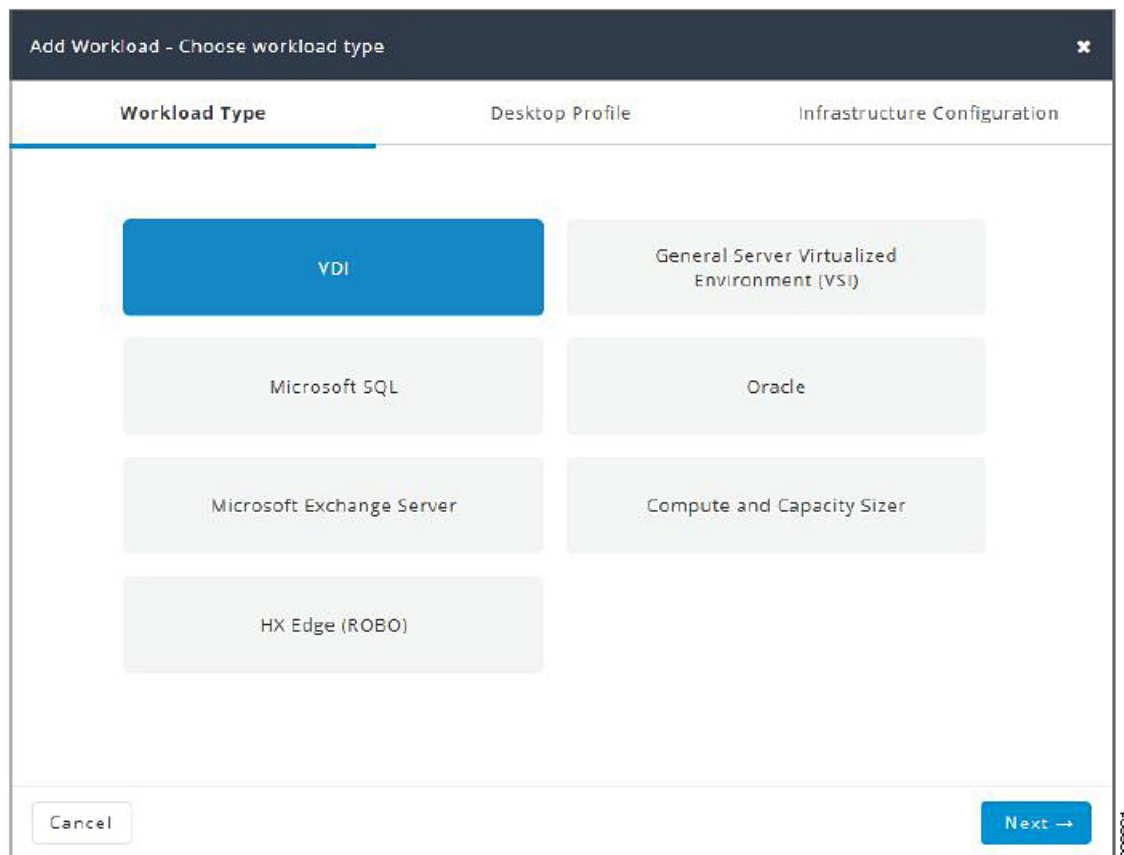


**注目** 推奨値はパフォーマンス テストに基づいているため、変更する場合は注意する必要があります。

VDI ワークロードを追加するには次の手順を実施します。

**ステップ 1** [+] アイコン ([ワークロード (Workloads)] の下) をクリックします。

**ステップ 2** [ワークロードタイプ (Workload Type)] ページで、次に示すように [VDI] を選択します。[次へ (Next)] をクリックします。



ステップ3 [デスクトッププロファイル (Desktop Profile)] ページ (次を参照) で、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[ワークロード名 (Workload Name)] フィールド	ワークロードの名前
[ユーザタイプ (User Type)] ドロップダウン リスト	<p>事前に定義されているリソース消費ユーザーの値リストから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [タスク ワーカー (Task Worker)]</li> <li>• [ナレッジ ワーカー (Knowledge Worker)]</li> <li>• [パワー ユーザー (Power User)]</li> <li>• [カスタムユーザー (Custom User)] : リストに記載されているテンプレートの事前定義のリソース消費値が要件を満たしていない場合は、[カスタムユーザー (Custom User)] オプションを選択して、[デスクトップ コンピューティング プロファイル (Desktop Compute Profile)] と [デスクトップ ストレージ プロファイル (Desktop Storage Profile)] の値を手動で入力します。</li> </ul>

UI 要素	説明
[プロビジョニング (Provision) ] ドロップダウンリスト	データを保持するには、次のオプションがあります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• [永続的なデスクトップ (Persistent Desktops) ] : デスクトップ上にデータを保持します。</li> <li>• [プールされたデスクトップ (Pooled Desktops) ] : デスクトップには保持されません。</li> </ul>
[OSタイプ] ドロップダウンリスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows 7</li> <li>• Windows 10</li> </ul>
[デスクトップ数 (Number of Desktops) ] フィールド	デスクトップの合計数を入力します。 制限は、デスクトップ 1 ~ 30,000 台です。
[同時実行 (%) (Concurrency (%)) ] フィールド	同時に電源をオンにしておく必要があるデスクトップの合計数に関連するパーセンテージを入力します。
[デスクトップには GPU が必要ですか? (Do the desktops require GPU?) ]	デスクトップで GPU を使用する必要があるかどうかを示します。
[デスクトップコンピューティング プロファイル (Desktop Compute Profile) ]	選択したユーザータイプに応じて、推奨値が変更されます。
[vCPU 数 (vCPUs) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [タスク ワーカー (Task Worker) ] - 1 vCPU</li> <li>• [ナレッジ ワーカー (Knowledge Worker) ] - 2 VCPU</li> <li>• [パワーユーザー (Power User) ] : 2 VCPU</li> </ul>
[Clock (MHz) (クロック (MHz)) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [タスク ワーカー (Task Worker) ] - 325 MHz</li> <li>• [ナレッジ ワーカー (Knowledge Worker) ] - 400 MHz</li> <li>• [パワーユーザー (Power User) ] : 400 MHz</li> </ul>
[Total RAM (GB) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [タスク ワーカー (Task Worker) ] - 1 GB</li> <li>• [ナレッジ ワーカー (Knowledge Worker) ] - 2 GB</li> <li>• [パワーユーザー (Power User) ] : 2 GB</li> </ul>

UI 要素	説明
<b>[デスクトップストレージプロファイル (Desktop Storage Profile) ]</b>	
<b>[平均ストレージ IOPS (Average Storage IOPS) ]</b> フィールド	選択したユーザータイプに応じて、推奨値が変更されます。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• [タスク ワーカー (Task Worker) ] – 6 IOPs</li> <li>• [ナレッジ ワーカー (Knowledge Worker) ] – 8 IOP</li> <li>• [パワーユーザー (Power User) ] : 10 IOP</li> </ul>
<b>[ユーザー/アプリケーション データ サイズ (GB) (User/Application Data Size (GB)) ]</b> フィールド	推奨値は 0 GB です。
<b>[OS イメージ サイズ (GB) (OS Image Size (GB)) ]</b> フィールド	推奨値は 20 GB です。
<b>[スナップショット数 (Number of Snapshots) ]</b> フィールド	推奨値は 0 GB です。
<b>[ワーキングセット サイズ (%) (Working Set Size (%)) ]</b> フィールド	推奨値は 10 % です。

[次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 4 [インフラストラクチャ設定 (Infrastructure Configuration) ]** ページ (次を参照) で、次のフィールドに値を入力します。

The screenshot shows the 'Add Workload - VDI' dialog box with the 'Infrastructure Configuration' tab selected. The settings are as follows:

Setting	Value
Data Replication Factor	RF 3
Performance Headroom (nodes)	1
Compression savings (%)	10
Deduplication Savings (%)	30

UI 要素	説明
[データレプリケーションファクタ (Data Replication Factor)] ドロップダウンリスト	データの冗長性を確保するために RF3 が推奨されています。
[パフォーマンスヘッドルーム (ノード数) (Performance Headroom (nodes))] ドロップダウンリスト	耐障害性のために使用するノードの数を入力します。推奨値は 1 ノードです。 [パフォーマンスヘッドルームを設定 (Setting Performance Headroom)] ではクラスタに新たなロードを追加して、ノード障害が発生した場合に十分なパフォーマンス帯域幅を確保します。
[圧縮節約率 (%) (Compression Savings (%)) ] フィールド	推奨値は 10 % です。
[重複排除設定 (%) (Deduplication Settings (%)) ] フィールド	推奨値は 30 % です。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

# 一般的なサーバー VSI ワークロードを追加する

デフォルト値を変更するには、[カスタマイズ (Customize)] をクリックします。

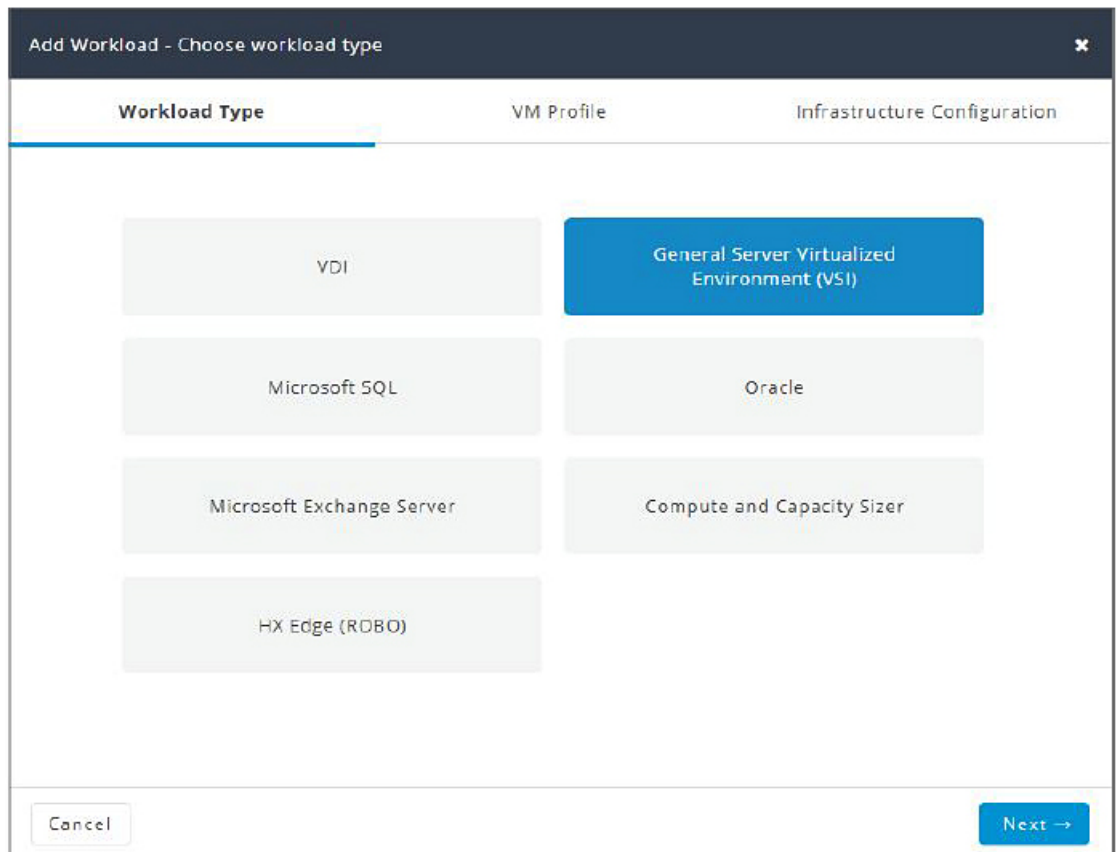


**注目** 推奨値はパフォーマンス テストに基づいているため、変更する場合は注意する必要があります。

一般的なサーバー仮想化環境 (VSI) ワークロードを追加するには次の手順を実施します。

**ステップ 1** [+] アイコン ([ワークロード (Workloads)] の下) をクリックします。

**ステップ 2** [ワークロードタイプ (Workload Type)] ページで、[一般的なサーバー仮想化環境 (VSI) (General Server Virtualized Environment (VSI))] を選択します (次を参照)。[次へ (Next)] をクリックします。



**ステップ 3** [VM プロファイル (VM Profile)] ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[ワークロード名 (Workload Name)] フィールド	ワークロードの名前を入力します。

UI 要素	説明
[VM タイプ (VM Type) ] ドロップダウン リスト	<p>事前定義されたリソース消費値のリストから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 小</li> <li>• 中</li> <li>• 大規模</li> <li>• [カスタム (Custom) ]: リストに記載されているテンプレート内の定義済みのリソース消費値が要件を満たしていない場合は、[カスタム (Custom) ] オプションを選択して、[インフラストラクチャの設定 (Infrastructure Configuration) ] ページでプロファイル値を入力します。</li> </ul>
[VM 数 (Number of VMs) ] フィールド	VM の数を入力します。
<b>[VM コンピューティング プロファイル (VM Compute Profile) ]</b> 選択した VM タイプに応じて、推奨値が変更されます。	
[vCPU 数 (vCPUs) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 2 vCPU</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 4 vCPU</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 8 vCPU</li> </ul>
[vCPU オーバープロビジョニング比率 (vCPU Overprovisioning Ratio) ] フィールド	すべての VM タイプの推奨値は、4 vCPU です。コアごとに包含できる vCPU の合計数。
[Total RAM (GB) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 8 GB</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 16 GB</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 32 GB</li> </ul>
<b>[VM ストレージ プロファイル (VM Storage Profile) ]</b> 選択した VM タイプに応じて、推奨値が変更されます。	
[平均 8K ストレージ IOPS (Average 8K Storage IOPS) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 50 IOPS</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 100 IOPS</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 200 IOPS</li> </ul>



UI 要素	説明
[ユーザー/アプリケーション データ サイズ (GB) (User/Application Data Size (GB)) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 50 GB</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 200 GB</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 750 GB</li> </ul>
[OS イメージ サイズ (GB) (OS Image Size (GB)) ] フィールド	<p>推奨値は 20 GB です。</p> <p>VM の OS イメージのサイズ。</p>
[スナップショット数 (Number of Snapshots) ] フィールド	推奨値は 5 スナップショットです。
[ワーキングセット サイズ (%) (Working Set Size (%)) ] フィールド	推奨値は 10 % です。

[次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 4** [インフラストラクチャ設定 (Infrastructure Configuration) ] ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[クラスタタイプ (Cluster Type) ] ボタン	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [標準 (Normal) ]</li> <li>• [ストレッチ (Stretch) ]: ストレッチクラスタは、重要度が高いデータに高可用性クラスタを提供します。このクラスタは 2 つの地理的地域に分散され、自然災害などの何らかの理由で 1 つのサイトが完全にダウンした場合でも使用可能になります。</li> </ul>
[データレプリケーションファクタ (Data Replication Factor) ] ドロップダウンリスト	RF2 は、可用性を高めるために推奨されています。
[パフォーマンスヘッドルーム (ノード数) (Performance Headroom (nodes)) ] ドロップダウンリスト	<p>耐障害性のために使用するノードの数を入力します。推奨値は 1 ノードです。</p> <p>[パフォーマンスヘッドルームを設定 (Setting Performance Headroom) ] ではクラスタに新たなロードを追加して、ノード障害が発生した場合に十分なパフォーマンス帯域幅を確保します。</p>
[圧縮節約率 (%) (Compression Savings (%)) ] フィールド	推奨値は 20 % です。
[重複排除による節減 (%) (Deduplication Savings (%)) ] フィールド	推奨値は 10 % です。

UI 要素	説明
[リモートレプリケーションを有効にしますか? (Enable Remote Replication?)]	<p>リモートレプリケーションを有効にする場合に選択します。次のように、ワークロードの配置とサイト障害の保護を設定できるようになりました。</p> <p>[プライマリワークロードの配置 (Primary Workload Placement)] ドロップダウン リスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• サイト A</li> <li>• サイト B</li> </ul> <p>[サイト障害からの保護 (ワークロードの%) (Site Failure Protection (% Workload))]: 推奨値は 100 です。</p>

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

## Microsoft SQL ワークロードを追加する

デフォルト値を変更するには、[カスタマイズ (Customize)] をクリックします。

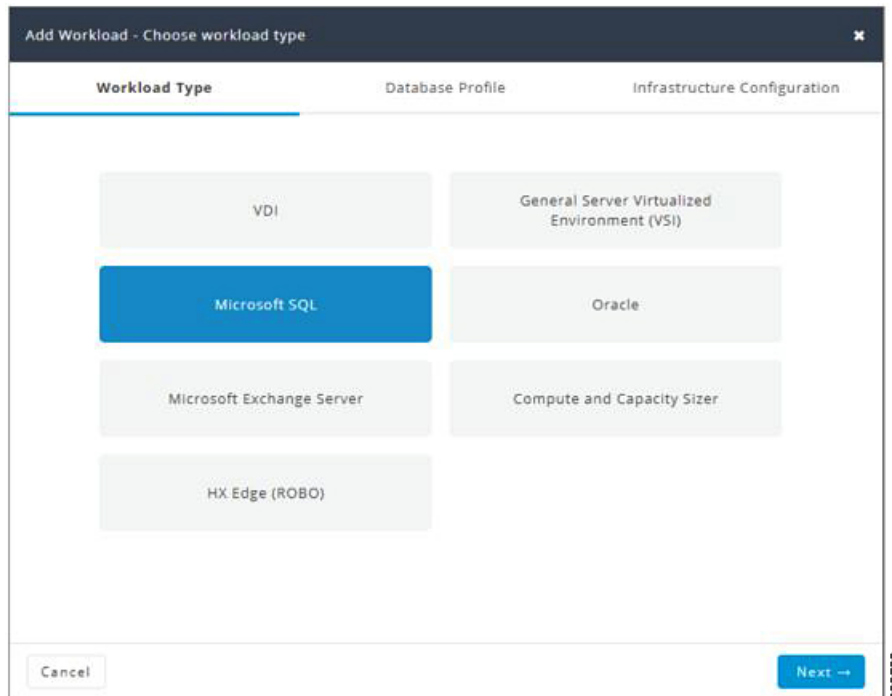


**注目** 推奨値はパフォーマンス テストに基づいているため、変更する場合は注意する必要があります。

Microsoft SQL ワークロードを追加するには次の手順を実施します。

ステップ 1 [+] アイコン ([ワークロード (Workloads)] の下) をクリックします。

ステップ 2 [ワークロード タイプ (Workload Type)] ページで、[Microsoft SQL] を選択します (次を参照)。[次へ (Next)] をクリックします。



ステップ3 [データベースプロファイル (Database Profile) ] ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[ワークロード名 (Workload Name) ] フィールド	ワークロードの名前を入力します。
[データベース タイプ (Database Type) ] ドロップ ダウンリスト	<p>[OLTP] または [OLAP] データベース タイプを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>[OLTP]</b> : トランザクション型ワークロードを表します。このサイジングツールでは、8K で読み取り 70 %、書き込み 30 % で構成されるワークロードが割り当てられます。OLTP の指定された数の IOPS へのサイズを設定する場合は 100 % ランダムになります。</li> <li>• <b>[OLAP]</b> : クエリ、レポート、または分析のワークロードを表します。Sizer では、指定されたスループットの OLAP をサイジングする場合、大規模なシーケンシャル読み取りで構成されるワークロードが割り当てられます。</li> </ul>

UI 要素	説明
[データベース プロファイル (Database Profile) ] ドロップダウン リスト	<p>事前定義されたデータベース プロファイル 値のリストから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 小</li> <li>• 中</li> <li>• 大規模</li> <li>• [カスタム (Custom) ] : リストに記載されているテンプレートの事前定義の値が要件を満たしていない場合は、[カスタム (Custom) ] オプションを選択して、[コンピューティング プロファイル (Compute Profile) ] と [ストレージ プロファイル (Storage Profile) ] の値を手動で入力します。</li> </ul>
[データベース数 (Number of Databases) ] フィールド	データベースの合計数を入力します。
<p>[コンピューティング プロファイル (Compute Profile) ]</p> <p>選択したデータベース プロファイルに応じて、推奨値が変更されます。</p>	
[vCPU 数 (vCPUs) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 2 vCPU</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 4 vCPU</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 8 vCPU</li> </ul>
[vCPU プロビジョニング比率 (vCPU Provisioning Ratio) ] フィールド	推奨値は 2 vCPU です。
[Total RAM (GB) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 8 GB</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 16 GB</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 32 GB</li> </ul>
<p>[ストレージ プロファイル (Storage Profile) ]</p> <p>選択したデータベース プロファイルに応じて、推奨値が変更されます。</p>	
[データベース サイズ (GB) (Database Size (GB)) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 400 GB</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 1000 GB</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 4000 GB</li> </ul>

UI 要素	説明
[IOPS] フィールド	<p>選択したデータベース タイプに基づいて、IOPS が変更されます。</p> <p>OLTP データベース タイプの場合は、次の値が推奨されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 1000 IOPS</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 3000 IOPS</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 10000 IOPS</li> </ul> <p>OLAP データベース タイプの場合は、次の値が推奨されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 100 MB/s</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 200 MB/s</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 800 MB/s</li> </ul>
[データベースのオーバーヘッド率 (Database Overhead (%)) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] ← 45 %</li> <li>• [中規模 (Medium) ] ← 40 %</li> <li>• [大規模 (Large) ] ← 30 %</li> </ul>

[次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 4** [インフラストラクチャ設定 (Infrastructure Configuration) ] ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[クラスタタイプ (Cluster Type) ] ボタン	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [標準 (Normal) ]</li> <li>• [ストレッチ (Stretch) ]: ストレッチクラスタは、重要度が高いデータに高可用性クラスタを提供します。このクラスタは2つの地理的地域に分散され、自然災害などの何らかの理由で1つのサイトが完全にダウンした場合でも使用可能になります。</li> </ul>
[データレプリケーションファクタ (Data Replication Factor) ] ドロップダウン リスト	データの冗長性を確保するために RF3 が推奨されています。

UI 要素	説明
[パフォーマンスヘッドルーム (ノード数) (Performance Headroom (nodes))] ドロップダウンリスト	耐障害性のために使用するノードの数を入力します。推奨値は1ノードです。  [パフォーマンスヘッドルームを設定 (Setting Performance Headroom)] ではクラスタに新たなロードを追加して、ノード障害が発生した場合に十分なパフォーマンス帯域幅を確保します。
[圧縮節約率 (%) (Compression Savings (%))] フィールド	推奨値は30%です。
[重複排除設定 (%) (Deduplication Settings (%))] フィールド	推奨値は0%です。
[リモートレプリケーションを有効にしますか? (Enable Remote Replication?)] チェックボックス	リモートレプリケーションを有効にする場合に選択します。次のように、ワークロードの配置とサイト障害の保護を設定できるようになりました。  [プライマリワークロードの配置 (Primary Workload Placement)] ドロップダウンリスト  <ul style="list-style-type: none"> <li>• サイト A</li> <li>• サイト B</li> </ul> [サイト障害からの保護 (ワークロードの%) (Site Failure Protection (% Workload))] : 推奨値は100です。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

## Oracle ワークロードの追加

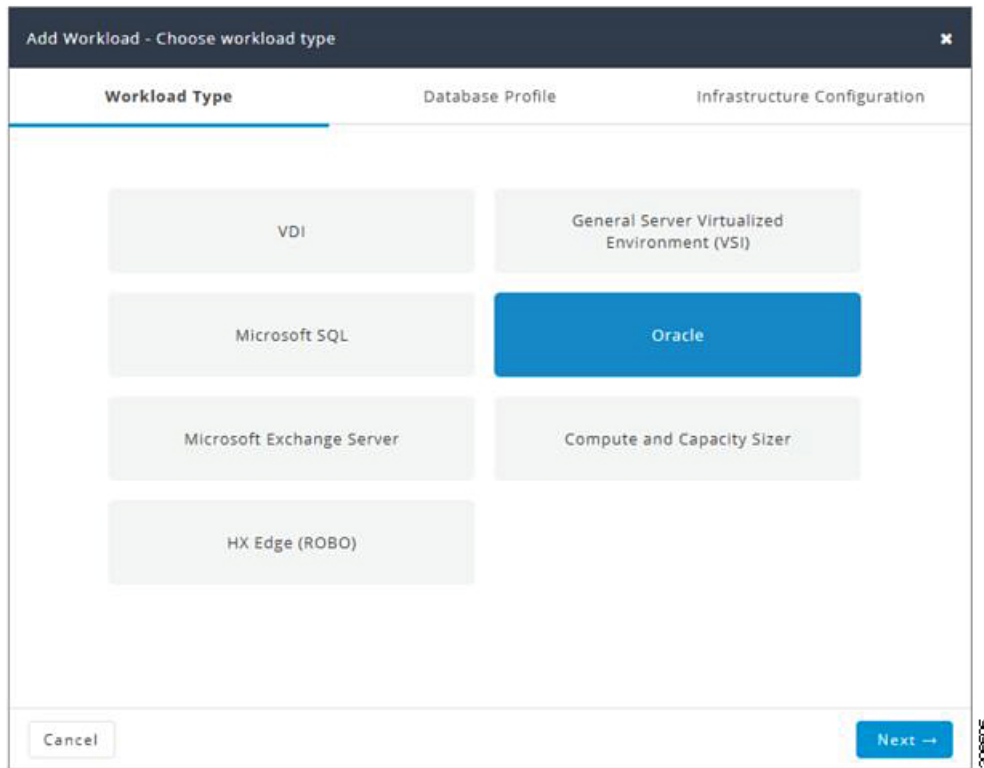
デフォルト値を変更するには、[カスタマイズ (Customize)] をクリックします。



**注目** 推奨値はパフォーマンステストに基づいているため、変更する場合は注意する必要があります。

ステップ 1 [+] アイコン ([ワークロード (Workloads)] の下) をクリックします。

ステップ 2 [ワークロードタイプ (Workload Type)] ページで、[Oracle] を選択します (次を参照)。[次へ (Next)] をクリックします。



ステップ 3 [データベースプロファイル (Database Profile) ] ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[ワークロード名 (Workload Name) ] フィールド	ワークロードの名前を入力します。
[データベース タイプ (Database Type) ] ドロップ ダウンリスト	<p>[OLTP] または [OLAP] データベース タイプを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>[OLTP]</b> : トランザクション型ワークロードを表します。このサイジングツールでは、8K で読み取り 70 %、書き込み 30 % で構成されるワークロードが割り当てられます。OLTP の指定された数の IOPS へのサイズを設定する場合は 100 % ランダムになります。</li> <li>• <b>[OLAP]</b> : クエリ、レポート、または分析のワークロードを表します。Sizer は、OLAP に指定されたスループットをサイジングする際に、大きなシーケンシャルの読み取りで構成されるワークロードを割り当てます。</li> </ul>

UI 要素	説明
[データベース プロファイル (Database Profile) ] ドロップダウン リスト	<p>事前定義されたデータベース プロファイル 値のリストから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 小</li> <li>• 中</li> <li>• 大規模</li> <li>• [カスタム (Custom) ] : リストに記載されているテンプレートの事前定義の値が要件を満たしていない場合は、[カスタム (Custom) ] オプションを選択して、[コンピューティング プロファイル (Compute Profile) ] と [ストレージ プロファイル (Storage Profile) ] の値を手動で入力します。</li> </ul>
[データベース数 (Number of Databases) ] フィールド	データベースの合計数を入力します。
<p>[コンピューティング プロファイル (Compute Profile) ]          選択したデータベース プロファイルに応じて、推奨値が変更されます。</p>	
[vCPU 数 (vCPUs) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] – 4 vCPU</li> <li>• [中規模 (Medium) ] – 8 vCPU</li> <li>• [大規模 (Large) ] – 16 vCPU</li> </ul>
[vCPU プロビジョニング比率 (vCPU Provisioning Ratio) ] フィールド	推奨値は 2 vCPU です。
[Total RAM (GB) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 小規模 – 16 GB</li> <li>• 中規模 – 64 GB</li> <li>• [大規模 (Large) ] – 96 GB</li> </ul>
<p>[ストレージ プロファイル (Storage Profile) ]          選択したデータベース プロファイルに応じて、推奨値が変更されます。</p>	
[データベース サイズ (GB) (Database Size (GB)) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] – 400 GB</li> <li>• [中規模 (Medium) ] – 1000 GB</li> <li>• [大規模 (Large) ] – 4000 GB</li> </ul>



UI 要素	説明
[IOPS] フィールド	<p>選択したデータベース タイプに基づいて、IOPS が変更されます。</p> <p>OLTP データベース タイプの場合は、次の値が推奨されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] ← 6000 IOPS</li> <li>• [中規模 (Medium) ] ← 10000 IOPS</li> <li>• [大規模 (Large) ] ← 30000 IOPS</li> </ul> <p>OLAP データベース タイプの場合は、次の値が推奨されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] ← 200 MB/s</li> <li>• [中規模 (Medium) ] ← 400 MB/s</li> <li>• [大規模 (Large) ] ← 1000 MB/s</li> </ul>
[データベースのオーバーヘッド率 (Database Overhead (%)) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] ← 45 %</li> <li>• [中規模 (Medium) ] ← 40 %</li> <li>• [大規模 (Large) ] ← 30 %</li> </ul>

[次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 4** [インフラストラクチャ設定 (Infrastructure Configuration) ] ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[クラスタタイプ (Cluster Type) ] ボタン	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [標準 (Normal) ]</li> <li>• [ストレッチ (Stretch) ]: ストレッチクラスタは、重要度が高いデータに高可用性クラスタを提供します。このクラスタは2つの地理的地域に分散され、自然災害などの何らかの理由で1つのサイトが完全にダウンした場合でも使用可能になります。</li> </ul>
[データレプリケーションファクタ (Data Replication Factor) ] ドロップダウン リスト	データの冗長性を確保するために RF3 が推奨されています。

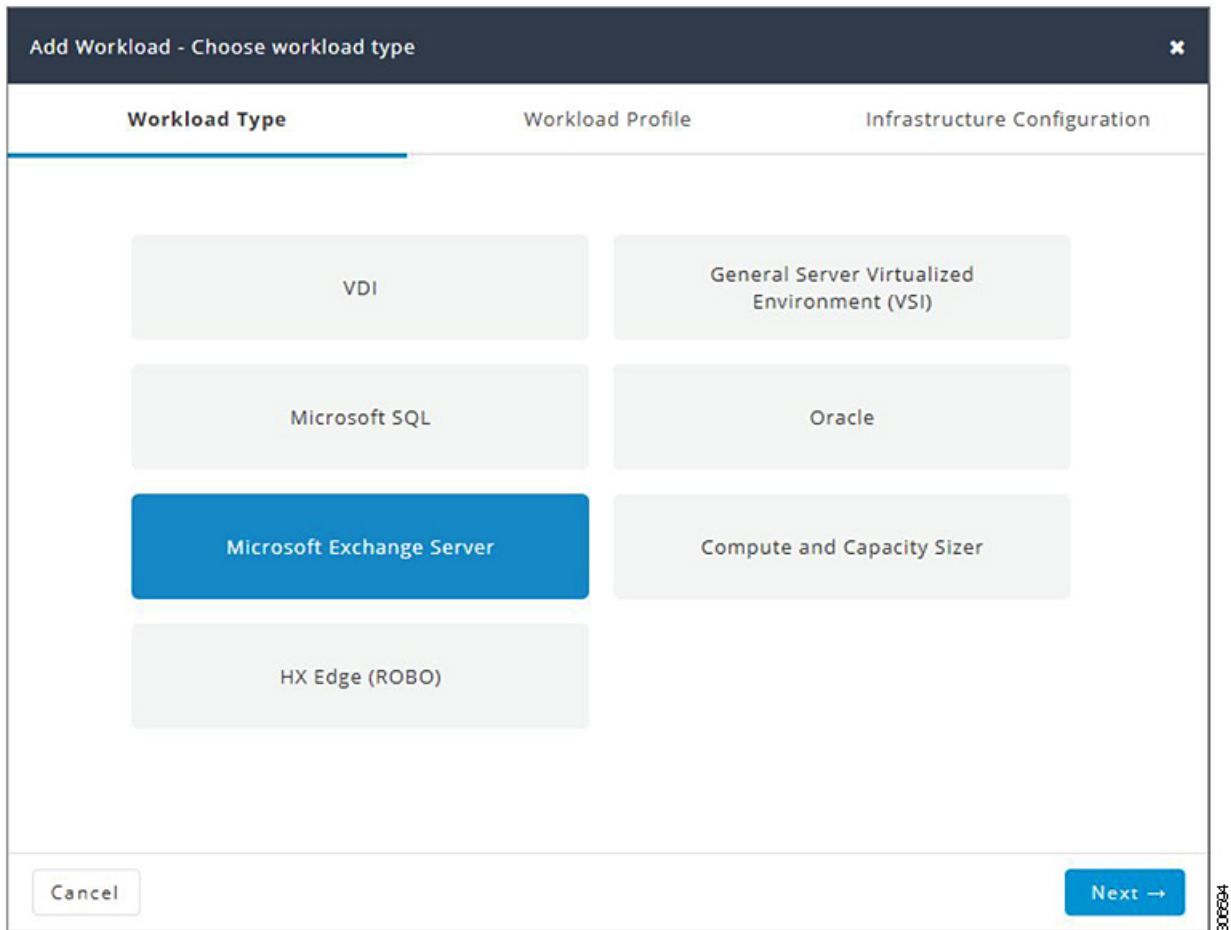
UI 要素	説明
[パフォーマンスヘッドルーム (ノード数) (Performance Headroom (nodes))] ドロップダウンリスト	耐障害性のために使用するノードの数を入力します。推奨値は1ノードです。  [パフォーマンスヘッドルームを設定 (Setting Performance Headroom)] ではクラスタに新たなロードを追加して、ノード障害が発生した場合に十分なパフォーマンス帯域幅を確保します。
[圧縮節約率 (%) (Compression Savings (%))] フィールド	推奨値は30%です。
[重複排除設定 (%) (Deduplication Settings (%))] フィールド	推奨値は0%です。
[リモートレプリケーションを有効にしますか? (Enable Remote Replication?)] チェックボックス	リモートレプリケーションを有効にする場合に選択します。次のように、ワークロードの配置とサイト障害の保護を設定できるようになりました。  [プライマリワークロードの配置 (Primary Workload Placement)] ドロップダウンリスト  <ul style="list-style-type: none"> <li>• サイト A</li> <li>• サイト B</li> </ul> [サイト障害からの保護 (ワークロードの%) (Site Failure Protection (% Workload))] : 推奨値は100です。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

## Microsoft Exchange Server のワークロードの追加

ステップ 1 [+] アイコン ([ワークロード (Workloads)] の下) をクリックします。

ステップ 2 [ワークロードタイプ (Workload Type)] ページで、[Microsoft Exchange Server] を選択します (次を参照)。[次へ (Next)] をクリックします。



**ステップ 3** [ワークロードプロファイル (Workload Profile)] ページでは、手動で値を入力することも、またはファイルからの値をインポートすることもできます。

UI 要素	基本的な情報
[ワークロード名 (Workload Name)] フィールド	ワークロードの名前を入力します。

UI 要素	基本的な情報
[ワークロード入力タイプ (Workload Input Type) ]	<p>[<a href="#">Microsoft Exchange 2013 Server ロール要件計算機 (Microsoft Exchange 2013 Server Role Requirements Calculator)</a> ] から Microsoft Exchange ワークロードモデリング スプレッドシートをダウンロードします。</p> <p><b>重要</b> Microsoft Exchange 2013 サイジング計算機が正しく入力されていることを確認します。<a href="#">Microsoft Exchange 2013 Server Role Requirements Calculator</a> の設定を参照してください。</p> <p>完了した .XLSM スプレッドシートをアップロードし、ワークロードの入力を処理します。</p>
[vCPU 数 (vCPUs) ] フィールド	システムオーバーヘッドのアカウントリング後に、すべての MS Exchange Server に必要なコアの合計数。Intel E5-2630 v4 は、コアカウントのリファレンス CPU として使用されます。
[vCPU オーバープロビジョニング比率 (vCPU Overprovisioning Ratio) ] フィールド	コアごとに包含できる vCPU の合計数。
[合計 RAM (GB) (Total RAM (GB)) ] フィールド	システムオーバーヘッドのアカウントリング後に、すべてのゲスト VM に必要な RAM の合計。
[実効ユーザー キャパシティ (GB) (Effective User Capacity (GB)) ] フィールド	この値は、重複除外または圧縮による節減によって異なります。[ <a href="#">インフラストラクチャ設定 (Infrastructure Configuration)</a> ] ページで、重複排除および圧縮による節減を変更できます。
[DB IOPS] フィールド	平均 16 KB IOPS、100% ランダムでの読み取り/書き込み比率は 60/40。
[ログ IOPS (Log IOPS) ] フィールド	平均 32 KB IOPS、100% ランダムでの読み取り/書き込み比率は 60/40。
[メンテナンス IOPS (Maintenance IOPS) ] フィールド	平均 64 KB IOPS、100% ランダムでの読み取り/書き込み比率は 60/40。
[成長予測 (%) (Future Growth (%)) ] フィールド	物理コア、RAM、および有効なユーザーキャパシティについて、将来の環境の成長を可能にするパーセンテージを指定します。

[次へ (Next) ] をクリックします。

ステップ4 [インフラストラクチャ設定 (Infrastructure Configuration)] ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	基本的な情報
[クラスタタイプ (Cluster Type)] ボタン	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [標準 (Normal)]</li> <li>• [ストレッチ (Stretch)]: ストレッチクラスタは、重要度が高いデータに高可用性クラスタを提供します。このクラスタは2つの地理的地域に分散され、自然災害などの何らかの理由で1つのサイトが完全にダウンした場合でも使用可能になります。</li> </ul>
[データレプリケーションファクタ (Data Replication Factor)] フィールド	RF3 は、可用性を高めるために推奨されています。
[パフォーマンスヘッドルーム (ノード数) (Performance Headroom (# of nodes))] フィールド	耐障害性ノードの数。 [パフォーマンスヘッドルームを設定 (Setting Performance Headroom)] ではクラスタに新たなロードを追加して、ノード障害が発生した場合に十分なパフォーマンス帯域幅を確保します。
[圧縮節約率 (%) (Compression Savings (%))] フィールド	デフォルトでは、15% に設定されています。 設定可能な範囲は 0 ~ 50% です。
[重複排除設定 (%) (Deduplication Settings (%))] フィールド	デフォルトでは、15% に設定されています。 設定可能な範囲は 0 ~ 70% です。

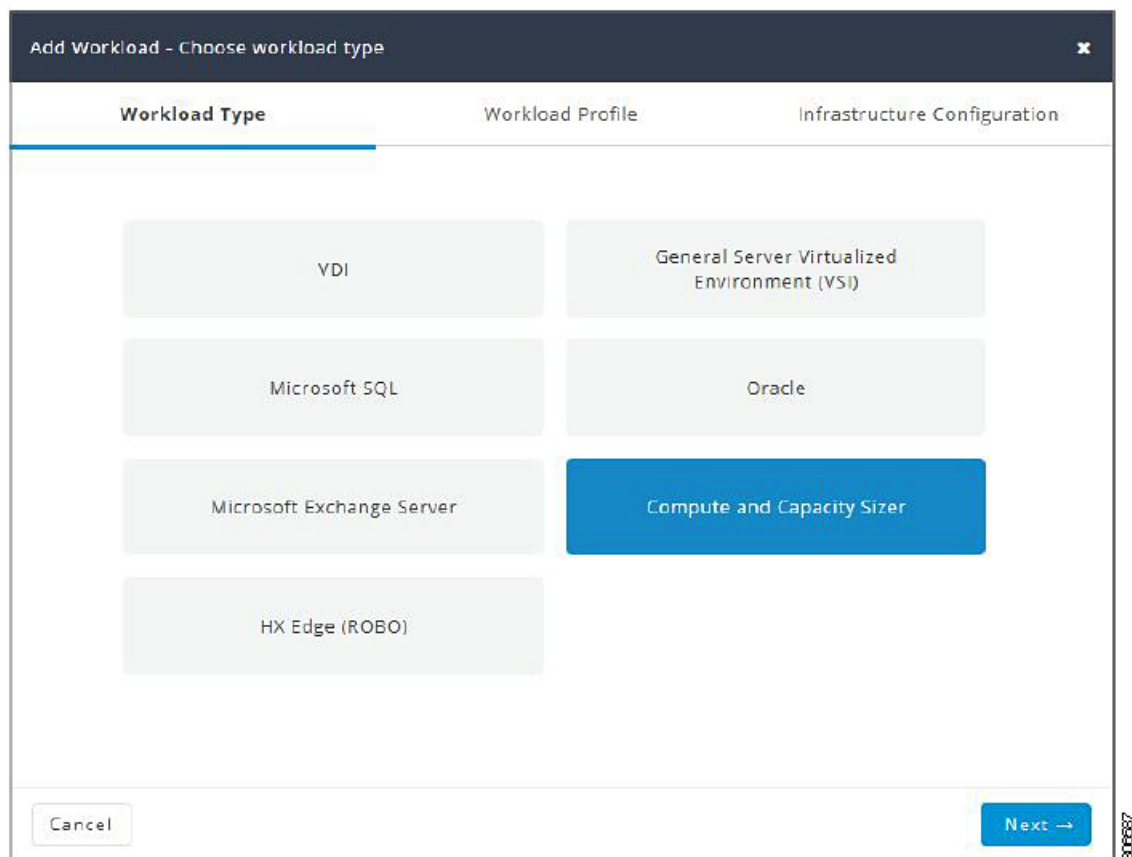
ステップ5 [保存 (Save)] をクリックします。

## コンピューティングとキャパシティサイジングツール (RAW) のワークロードの追加

コンピューティングとキャパシティのサイジングツールワークロードを追加するには、次の手順を実施します。

ステップ1 [+] アイコン ([ワークロード (Workloads)] の下) をクリックします。

ステップ2 [ワークロードタイプ (Workload Type)] タブで、[コンピューティングとキャパシティサイジングツール (Compute and Capacity Sizer)] を選択します (次を参照)。[次へ (Next)] をクリックします。



ステップ3 [ワークロードプロファイル (Workload Profile)] ページでは、手動で値を入力することも、またはファイルからの値をインポートすることもできます。

UI 要素	説明
[ワークロード名 (Workload Name)] フィールド	ワークロードの名前を入力します。
[ワークロード入力タイプ (Workload Input Type)] ボタン	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [手動 (Manual)] : デフォルト値を使用する場合は、このオプションを選択します。</li> <li>• [ファイル (File)] : CSV ファイルから値をインポートできます。CSV ファイルは HxProfiler からダウンロードできます。</li> </ul> <p>[ファイル (File)] オプションでは、次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• HX Profiler ツールからの 30 日間の要約 (30 日間は HX Profiler ツールから CSV ファイルをダウンロードできます)。</li> <li>• RV ツールの出力</li> </ul>

UI 要素	説明
[CPU ユニット (CPU Unit) ] フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• デフォルトは[コア (Cores) ]です。</li> <li>• [クロック (Clock) ]</li> </ul>
[合計 vCPU 数 (Total vCPUs) ] フィールド	デフォルトは 2 vCPU です。 システムオーバーヘッドのアカウントリング後に、すべてのゲスト VM に必要なコアの合計数。
[CPU オーバープロビジョニング比率 (CPU Overprovisioning Ratio) ] フィールド	デフォルトは 1 vCPU です。 コアごとにパックできる vCPU の合計数。
[合計 RAM (GB) (Total RAM (GB)) ] フィールド	デフォルトは 128 GB です。 システムオーバーヘッドのアカウントリング後に、すべてのゲスト VM に必要な RAM の合計。
[実効ユーザー キャパシティ (GB) (Effective User Capacity (GB)) ] フィールド	デフォルトは 1000 GB です。 この値は、重複除外または圧縮による節減によって異なります。[インフラストラクチャ設定 (Infrastructure Configuration) ] ページで、重複排除および圧縮による節減を変更できます。
[成長予測 (%) (Future Growth (%)) ] フィールド	物理コア、RAM、および有効なユーザーキャパシティについて、将来の環境の成長を可能にするパーセンテージを指定します。

[次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 4** [インフラストラクチャ設定 (Infrastructure Configuration) ] ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[クラスタタイプ (Cluster Type) ] ボタン	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [標準 (Normal) ]</li> <li>• [ストレッチ (Stretch) ]: ストレッチクラスタは、重要度が高いデータに高可用性クラスタを提供します。このクラスタは 2 つの地理的地域に分散され、自然災害などの何らかの理由で 1 つのサイトが完全にダウンした場合でも使用可能になります。</li> </ul>
[データレプリケーションファクタ (Data Replication Factor) ] フィールド	RF3 は、可用性を高めるために推奨されています。

UI 要素	説明
[パフォーマンスヘッドルーム (ノード数) (Performance Headroom (# of nodes)) ] フィールド	耐障害性ノードの数。 [パフォーマンス ヘッドルームを設定 (Setting Performance Headroom) ]ではクラスタに新たなロードを追加して、ノード障害が発生した場合に十分なパフォーマンス帯域幅を確保します。
[圧縮節約率 (%) (Compression Savings (%)) ] フィールド	デフォルトでは、0 に設定されます。 設定可能な範囲は 0 ~ 50% です。
[重複排除設定 (%) (Deduplication Settings (%)) ] フィールド	デフォルトでは、0 に設定されます。 設定可能な範囲は 0 ~ 70% です。

ステップ 5 [保存 (Save) ] をクリックします。

## HyperFlex Edge (ROBO) ワークロードを追加する

デフォルト値を変更するには、[カスタマイズ (Customize) ] をクリックします。



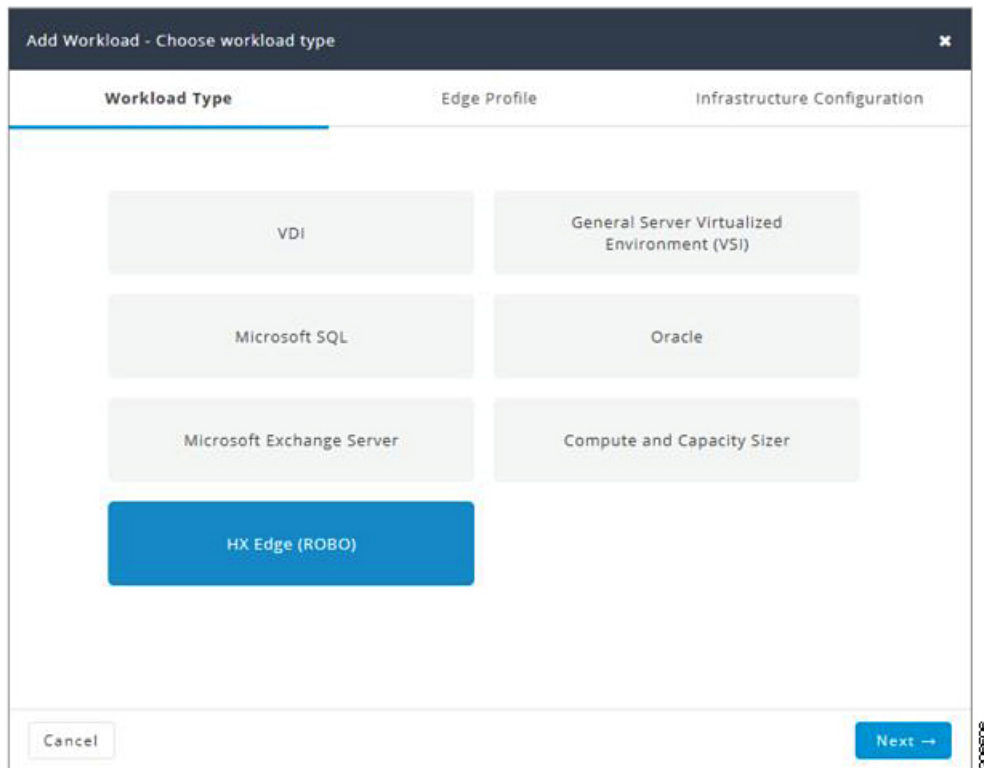
**注目** 推奨値はパフォーマンス テストに基づいているため、変更する場合は注意する必要があります。

HyperFlex Edge (ROBO) ワークロードを追加するには、次の手順を実施します。

ステップ 1 [+] アイコン ([ワークロード (Workloads) ] の下) をクリックします。

ステップ 2 [ワークロードタイプ (Workload Type) ] ページで、[HX Edge (ROBO) (HX Edge (ROBO)) ] を選択します (次を参照) 。[次へ (Next) ] をクリックします。





ステップ3 [Edge プロファイル (Edge Profile)] ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[ワークロード名 (Workload Name)] フィールド	ワークロードの名前を入力します。
[VM タイプ (VM Type)] ドロップダウン リスト	事前定義されたリソース消費値のリストから選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 小</li> <li>• 中</li> <li>• 大規模</li> <li>• [カスタム (Custom)] : リストに記載されているテンプレート内の定義済みのリソース消費値が要件を満たしていない場合は、[カスタム (Custom)] オプションを選択して、[インフラストラクチャの設定 (Infrastructure Configuration)] ページでプロファイル値を入力します。</li> </ul>
[VM 数 (Number of VMs)] フィールド	VM の数を入力します。

UI 要素	説明
<b>[VM コンピューティング プロファイル (VM Compute Profile) ]</b> 選択した VM タイプに応じて、推奨値が変更されます。	
<b>[vCPU 数 (vCPUs) ]</b> フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 2 vCPU</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 4 vCPU</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 8 vCPU</li> </ul>
<b>[vCPU オーバープロビジョニング比率 (vCPU Overprovisioning Ratio) ]</b> フィールド	すべての VM タイプの推奨値は、4 です。 コアごとに包含できる vCPU の合計数。
<b>[Total RAM (GB) ]</b> フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 8 GB</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 16 GB</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 32 GB</li> </ul>
<b>[VM ストレージ プロファイル (VM Storage Profile) ]</b> 選択した VM タイプに応じて、推奨値が変更されます。	
<b>[平均 8K ストレージ IOPS (Average 8K Storage IOPS) ]</b> フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 50 IOPS</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 100 IOPS</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 200 IOPS</li> </ul>
<b>[ユーザー/アプリケーション データ サイズ (GB) (User/Application Data Size (GB)) ]</b> フィールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [小規模 (Small) ] - 50 GB</li> <li>• [中規模 (Medium) ] - 100 GB</li> <li>• [大規模 (Large) ] - 750 GB</li> </ul>
<b>[OS イメージサイズ (GB) (OS Image Size (GB)) ]</b> フィールド	推奨値は 20 GB です。 VM の OS イメージのサイズ。
<b>[スナップショット数 (Number of Snapshots) ]</b> フィールド	推奨値は 5 スナップショットです。
<b>[ワーキングセットサイズ (%) (Working Set Size (%)) ]</b> フィールド	推奨値は 10 % です。

[次へ (Next) ] をクリックします。

**ステップ 4 [インフラストラクチャ設定 (Infrastructure Configuration) ]** ページで、次のフィールドに値を入力します。

UI 要素	説明
[データレプリケーションファクタ（Data Replication Factor）] ドロップダウン リスト	注意 Edge ワークロードでサポートされるのは、RF2 のみです。
[パフォーマンスヘッドルーム（ノード数）（Performance Headroom (nodes)）] ドロップダウン リスト	耐障害性のために使用するノードの数を入力します。推奨値は1ノードです。  [パフォーマンスヘッドルームを設定（Setting Performance Headroom）] ではクラスタに新たなロードを追加して、ノード障害が発生した場合に十分なパフォーマンス帯域幅を確保します。
[圧縮節約率（%）（Compression Savings (%)）] フィールド	推奨値は 20 % です。
[重複排除による節減（%）（Deduplication Savings (%)）] フィールド	推奨値は 10 % です。

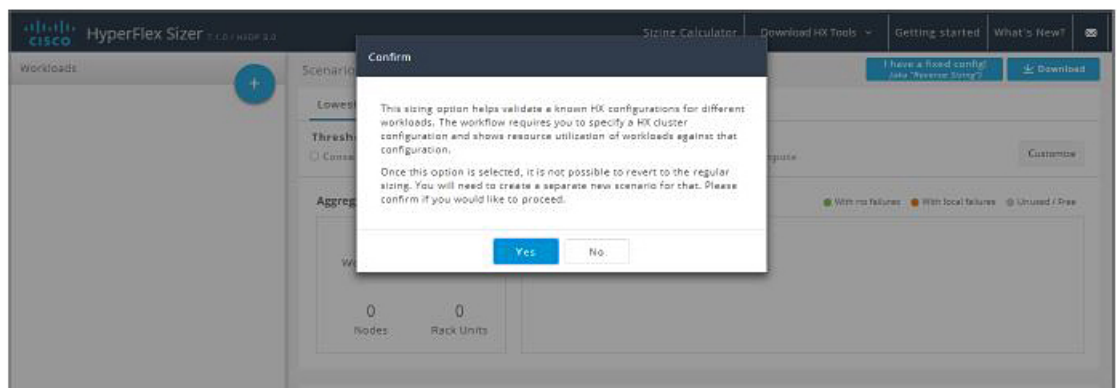
ステップ 5 [保存（Save）] をクリックします。

## 固定（リバース）構成のサイジング

固定サイジング（「リバースサイジング」とも呼ばれます）のワークフローは固定構成で始まり、指定された一連のワークロードがその構成で実行できるかどうかを検証されます。通常のサイジングでは、ワークフローを実行することで、一連のワークロードに対する最適なコストの HX 構成が特定されます。

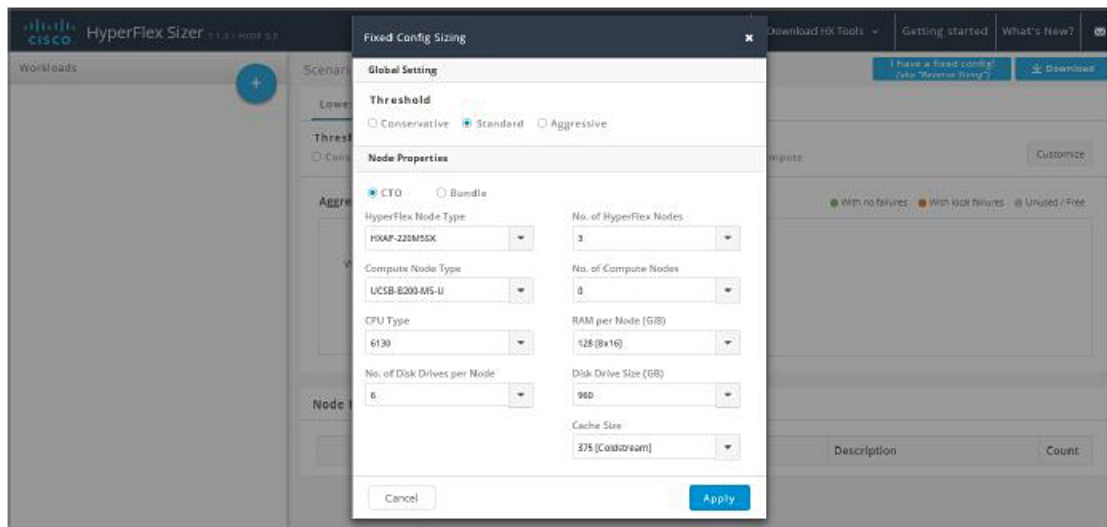
固定構成のサイジング ワークフローを追加するには、次の手順を実施します。

ステップ 1 新しいシナリオを作成し、[固定構成がある（「リバースサイジング」）（I have fixed config (aka "Reverse Sizing")）] をクリックします。[はい（Yes）] をクリックして確定します（次の図を参照）。

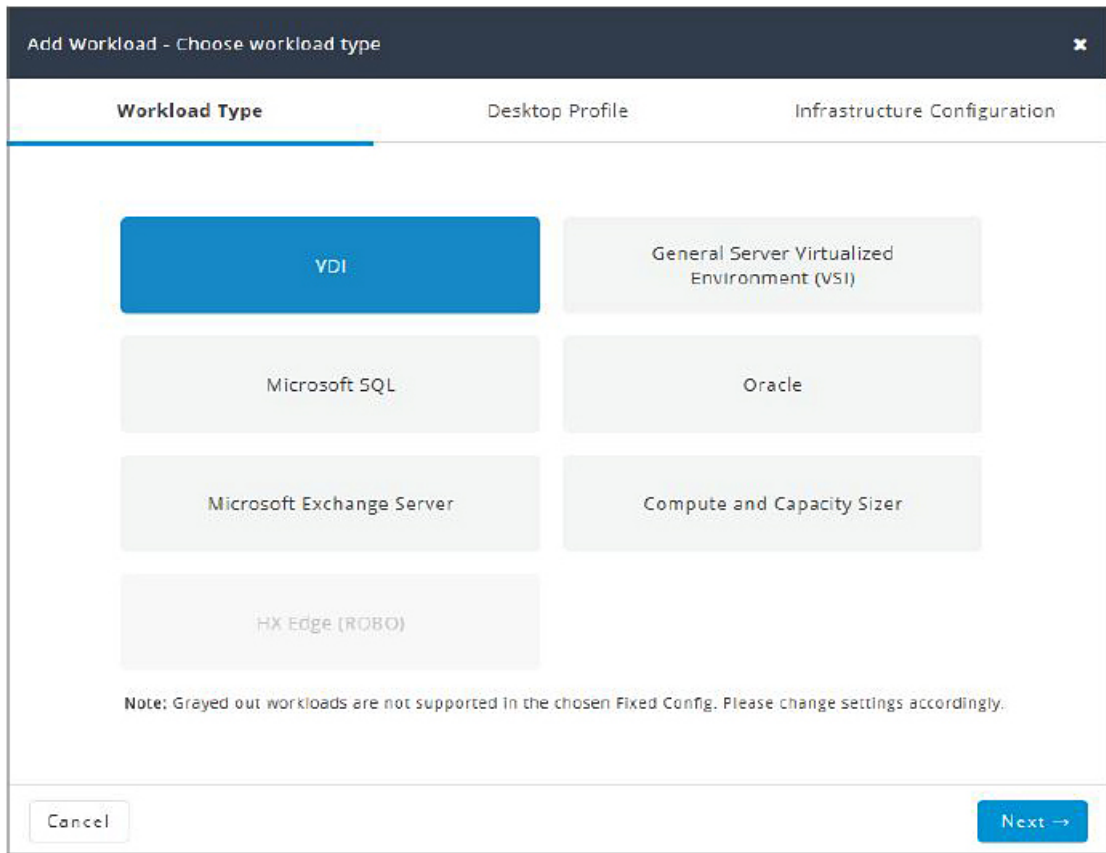


(注) 固定構成（固定サイジング）に変更すると、通常のサイジングに戻すことはできません。

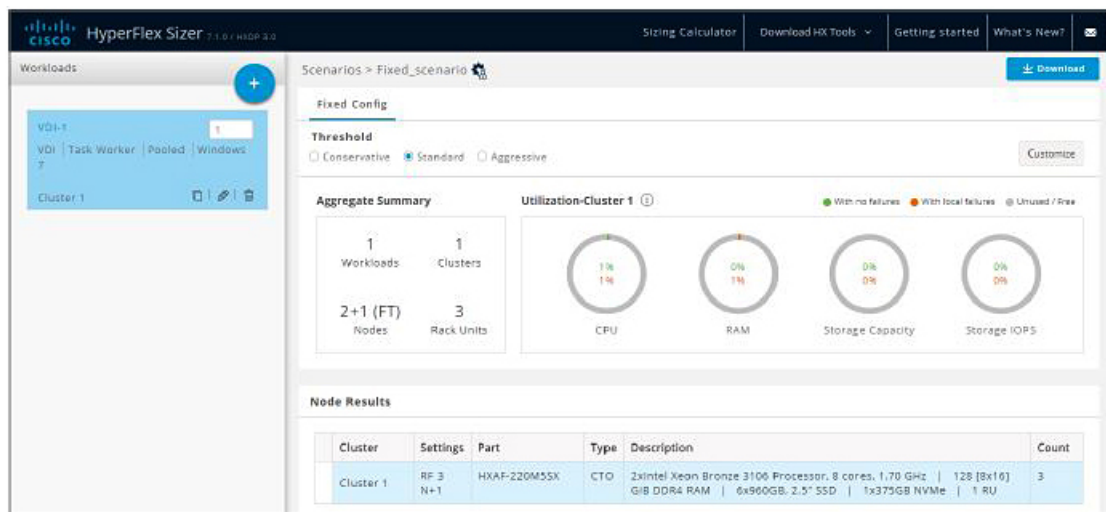
**ステップ2** [固定構成サイジング（Fixed Config Sizing）] タブに、HyperFlex ノードとコンピューティング ノードを選択するオプションが表示されます（次の図を参照）。選択を行い、[Apply] をクリックします。[シナリオ（Scenario）] ページがリロードされます。



**ステップ3** [+] アイコン（[ワークロード（Workloads）] の下）をクリックすると、サポートされているさまざまなワークロードタイプを示すダイアログボックスが表示されます（次を参照）。グレーアウトされたワークロードは、選択した固定構成ではサポートされません。この設定は、[シナリオ（Scenario）] ページで [カスタマイズ（Customize）] ボタンを選択することで変更できます。



306691



306697

他のワークロードは、1つのクラスタに配置できるこれらのワークロードのクラスタリングに基づいて、固定構成のサイジングに追加できます。標準のクラスタリング形式には次のものがあります。

[VDI], [VSI, DB, ORACLE], [RAW], [EXCHANGE], [ROBO]

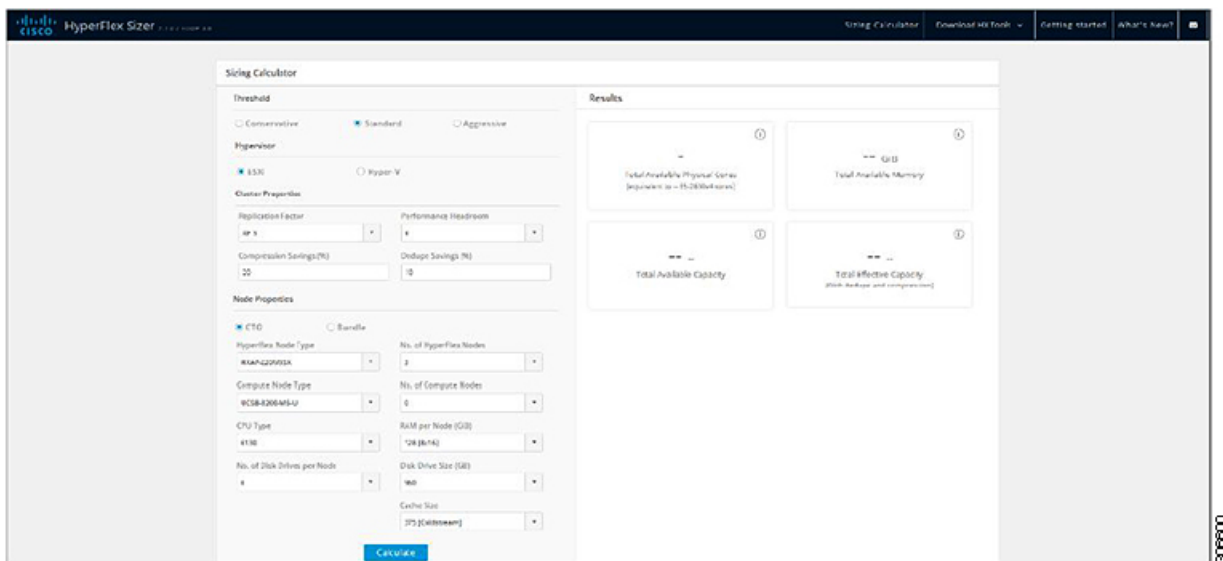
(注) 固定構成サイジングの場合、ストレッチクラスタとレプリケーションはサポートされません。

## サイジング計算ツール

サイジングカリキュレータは、指定されたノード構成に基づいて、予約分やオーバーヘッド分を除いた後に利用できる実効リソースを計算するツールです。

サイジングカリキュレータを使用するには、次の手順を実施します。

**ステップ1** 必要な構成を選択し、[計算 (Calculate) ] ボタンをクリックします (次の図を参照)。



**ステップ2** サイジングカリキュレータレポートをダウンロードする場合は、[レポートのダウンロード (Download Report) ] をクリックします (次の図を参照)。

The screenshot displays the HyperFlex Sizer application interface. The left pane is titled "Setting Calculator" and contains several sections for configuration:

- Workload:** Radio buttons for "Continuous", "Variable" (selected), and "Aggressive".
- Features:** A checkbox for "Hyper-V" which is currently unchecked.
- Disk Properties:** Fields for "Spindle Factor" (set to 8), "Performance Classroom" (set to 8), "Compression Settings (%)", and "Shrink Settings (%)".
- Node Properties:** Radio buttons for "7TB" (selected) and "4TB".
- HyperFlex Node Type:** A dropdown menu set to "HDF-2000R0".
- Number of HyperFlex Nodes:** A dropdown menu set to "4".
- Compute Node Type:** A dropdown menu set to "UCS-6000R03".
- Number of Compute Nodes:** A dropdown menu set to "6".
- CPU Type:** A dropdown menu set to "X56".
- RAM per Node (GB):** A dropdown menu set to "128 (64K)".
- Number of Data Disks per Node:** A dropdown menu set to "6".
- Disk Drive Size (TB):** A dropdown menu set to "7.5".
- Cache Size:** A dropdown menu set to "2GB (2048MB)".

The right pane is titled "Results" and displays four key metrics in a grid:

- 76:** Total Available Physical Capacity (dependent on node selection).
- 220.8 GB:** Total Available Memory.
- 3.7 TB:** Total Available Capacity.
- 5.2 TB:** Total Effective Capacity (with 10% compression).

At the bottom of the interface, there are two buttons: "Estimate" and "Download Report".

300000





## 翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。